



1 マレーシアからの留学生などと一緒にネイティブ英語を学ぶ。
2 マスコット「イーブーくん」の横に教員への質問ボックス。
3 教員の紹介コーナー。筆記体英語を学ぶ。
4 コンピュータ制御の英語学習システム。
5 約8000冊の洋書が並びリーディングラボ

宇都宮大学



外国人教員数	28人 (比率4.9%)
外国人留学生数	92人 (比率2.2%)
就職率	90.0%
科学研究費補助金	3億0849万円

7つの施設で英語を浴びる。

13年度の英語教育実践賞



教え上手の教員そろえ 学生全員レベルアップ

2009年から新しい英語教育プログラムEPUU(イーブー・English Program of Utsunomiya University)

を開始し、成果を上げているのが宇都宮大学だ。13年度には大学英語教育学会賞(実践賞)を受賞した。「EPUUの最大の特徴は、英語教育の目的を「学生が話せるようになること」にはっきり絞った点」と江川美知子教授。このため英語の教員は、研究実績ではなく「教えるのがうまい」という観点で集めた。ただし、質を担保するため日本人教員については、TESOL(英語を母国語としない人たち向けの英語教授法を英語圏の大学院で学んでいることを条件にした)。

日本国内において英語が話せるようになるためには、英語を浴びる環境を作り出す必要がある。そのためのさまざまな仕掛けを作った。

まず、学生が自主的に使える施設を充実させた。8000冊の洋書が並びリーディングラボ、ワイドスクリーンと37席を備えたシアター、1300本の映画をそえたDVDラボ、英語ネイティブの教員が個人指導をするクリニクなど7施設だ。授業を面白くすることにも知恵を

絞っている。特に映画を題材とする授業は、「映画を見ながら英語特有の言い回しや単語を覚えられろ」(農学部1年の杉田万由子さん)と好評だ。1年次は必修で、2年次は選択となっている。

多読にも力を入れている。1年生は1週間に50〜150ページを読まなければならない。学生が興味を持てるよう、リーディングラボの本はすべて表紙が見えるように置いてある。書棚は0〜9の10段階。「0」の棚にはボキヤブラリー数200語未満、「9」の棚には同2000、2500語の本が並べられている。当初はボキヤブラリー数200〜399語の「1」が最低レベルだったが、50ページを読み切れない学生が続出したので、即座にレベル0のコーナーを作った。1週間に何ページ読めたかをグラフにし、読み終わったらブックリポートを書き、英語の教員に提出する。読めたページ数が増えていかない学生、読解力が向上しない学生には個人指導もある。

一方で、英語力の高い学生向けに特別なプログラムも用意されている。学部に関係なく、TOEIC650点以上が目安。週1回の授業ではディベートやプレゼンテーション、論文の書き方などを学ぶ。秋には2泊3日、英語のみで生活する特別キャンプも行う。日光で外国人観光客に英語でインタビュするなど、英語漬けの日々を過ごす。このプログラムに参加できる学生はオナズスチューデントと呼ばれる、リーディングラボで司書業務のアルバイトをする権利がある。同ラボ内は日本語禁止。流暢な英語で応対するオナズスチューデントの存在は、一般学生にとってはちょっとしたカルチャーショックで、大きな刺激になるようだった。

実際、今年度のオナズスチューデントは、1年生は23人だが、4年生は68人。努力して2年生や3年生から加わる学生が少なくない。さらに学生のモチベーションをかき立てているのが、外国人数員から週1回20分、1対1の個人指導を無料で受けられるクリニクだ。TOEIC550点以上の学生しか受けられない。この受講を目的に英語学習に励み、550点以上を獲得する学生が増えている。

英語嫌いな英語好きに、英語の上級者ならもっと上手に、学生の気持ちに沿った英語教育を行っていることが、学生の英語力アップにつながっているようだ。